
A・N アリスノート

璃玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・N アリスノート

【Nコード】

N0405F

【作者名】

璃玖

【あらすじ】

もし『DEATHNOTE』のキャラクター達が、不思議の国の住人だとしたら…？白うさぎ・イカレ帽子屋・チェシャ猫など、個性豊かなキャラクター達が繰り広げるパレルワールド。誰が何のキャラクターなのかは、読んでみてのお楽しみ。『不思議の国のアリス』と『DEATHNOTE』混合パロディ小説。

001・白ウサギ現る

たとえば目の前に、さらさらと光り輝く銀髪に射抜くような眼光を放つ漆黒の瞳を持った、この世のものとは思えないほど美しい少年がいたとする。

だとしたら、人はどんな行動をとるであろうか。

人目を気にしつつも美しさに目を奪われ穴が開くほど見つめるか、人の目なんて関係なく本能のままに少年を追いつけるか。

「まてえええー！！」

私 シギノアリス 志城之有珠は勿論、後者を取った。

【白ウサギ現る】

「…何なんですかいきなり」

「喋った！私話し掛けられた！」

「……………」

傍から見ればそれは明らかに異常な光景。突然物凄いスピードで何やら喚きながら走ってきた少女が、道端で一人歩いていた見ず知らずの少年に背後から抱きつくという、簡単に言ってしまうえば痴漢に等しい行動である。

「可愛い！可愛すぎる！」

「変態ですか」

抱き締めれば抱き締めるほど心地いい。有珠よりも幾つか幼いのだろうが、子供独特のやわらかな体付きは抱き締め心地が良く、ふわりと風になびく癖のある銀髪が頬を撫でるたびにシャンプーの香が鼻をくすぐった。

「いい匂いする…」

「…変態ですね」

抱き締められた格好のまま半眼で睨み付けてくる少年。視界の端に何か白いものが見えたような気がしてふと視線をあげると、信じられないものが有珠の目に映った。

「耳…？」

少年の頭のとっぺんに二つ、白くてふわふわの長い耳がくっついていた。

「…コスプレの趣味があるんだ…」

「違います。出てしまっただけです」

「うんうん、似合ってるよすっごい可愛い」

「人の話を聞いてください」

少年は無表情のまま、有珠の頬をぐいぐいと押して距離をとった。有珠は離れがたかったが、抵抗を示した少年に渋々と拘束を解いた。

「これは正真正銘、本物の耳です」

「うそだあ、本物ってまさか」

有珠は訝しげに眉をよせ、白い耳に手を伸ばす。ふわりとやわらかい感触。指先にほんのりと感じる人肌の温かさに、有珠の心臓が跳ねた。

「うそ…あつたかい。本物…？」

「嘘などついてどうするんですか」

そう言って少年は、くすぐったいのか耳をピクリと動かした。

「君、ウサギ？…人間？」

有珠の問いに少年は否定も肯定もしなかった。射抜くような眼差しを、真っすぐにこちらに向けて。

「そのどちらでもあるし、そのどちらでもない」

そう呟いた少年の表情に、有珠の心臓が再び音を立てた。

「変ですか？私の存在が」

「……っ」

何かに声を奪われてしまったかのように、喉の奥が締め付けられて声が出ない。

「私の生きる世界とあなた方の生きる世界とでは、相違がありすぎるんです」

「…君の、世界？」

やっと出てきた声は、自分自身でも驚いてしまうほどに掠れていて。

「思想も価値観も、何もかも。あなたにはわからない」

「…っ」

「所詮、住む世界の異なる者同士。関わるべきではない」

「じゃあ何で、君はここに…」

「それがあなたに、一体何の関係があるというのです？」

そう言った少年の声は、ひどく冷たかった。有珠は再び何も言えなくなり、下唇を噛み締める。

「わかっていただけたのでしたら、もう私には関わらないでください。私に出会ったことも今話したことも、全て忘れてください。それがあなた方のためでもありますから」

「…り…」

「…はい？」

「無理、絶対に嫌」

「無理だとか嫌だとか、そういうことはありません。わかりませんか？これは忠告です」

「無理つてば無理！嫌ったら嫌だッ！」

有珠は疼く本能に身を任せて少年に抱きついた。意地でも放すもんかと強く抱き締める。

「出会ってものは必然なんだから！忘れたりなんかできないし、

そんなことしたくない！」

「放してください」

「嫌！死んでも放さない」

「…せいぜい、後悔でもしてください」

低く囁いた少年に、有珠は気負けしまいとさらに抱き締める腕に力を込める。

「脅しなんか怖くないんだか　らっ！？」

突然、何かに引つ張られるような感覚が全身を襲った。四方八方至る所から信じられないほどの引力を感じ、それは全身がバラバラに引きちぎられるのではないかと思うほどだった。

「……放さ……い……だか、らっ……！」

これでもかと腕にしがみついた次の瞬間、全く逆の感覚が全身に襲い掛かってきた。何かに押しつぶされているような圧迫感に息が止まる。何分にも感じられたもののその現象は実際にはほんの数秒であったようで、意識を失うことはなかった。足が地面について安堵の波が押し寄せてきて、へなへなと地面にへたりこんだ。

「何…今の…」

「ただの次元転換です、問題ありません」

「じっ、じげ…っ!？」

「…自毛に自耳ですが、何か？」

「いや、えっと、すごい綺麗な銀髪だねえ…」

真面目に答えてしまっただけから、有珠は首を傾げた。

「って、そうじゃなくて。確かに、人工的かと思うくらいに綺麗な銀髪だけど」

「それはどうも」

まともに取り合おうとしない少年の受け答えに、有珠は力チンときてしまった。眉を釣り上げて睨み付けるも、少年はどこ吹く風。

「さっきから、人を馬鹿にしたような対応ばかり…いくらなんでも失礼じゃない？」

仮にも有珠のほうが年上なのだ、敬意を払えとまでは言わないが、常識的な対応をしてもらいたいものである。しかしながら、言ってみたものの自信が無くなってしまった。こんな可愛い姿をした不思議な少年のことだ。不思議の国に住む不老不死の生きもので実は百歳越えてます、なんてことも十分に有り得るのではないだろうか。

「……………君、いくつ？」

「十七ですが何か？」

「やっぱり、私より年下じゃん」

ひそかに安堵する有珠。

「私より年上なんですか」

「そうだよ。私十八だもん」

「……………」

「…何その疑うような目は」

「…別に、あなたの年齢などに興味はありません」

それにしても、訝しげな視線がチクチクと痛かった気がする。

「て言うか、ここって一体…？」

「……………」

再び黙り込む少年に、今度は有珠が訝しい視線を向ける番だった。

「……………完全に遅刻です」

「はい？」

「最悪ですとんだ大失態です末代までの恥曝しです」

「何もそこまで言わなくても、たまの遅刻くらい誰にでもあるでしょ」

「それでは失礼します」

「失礼しますって、ちょっと！私はどうすればいいのっ！？」

「知りません、あなたが勝手についてきたのですから」

「つれてきたのは君でしょ！…って、ああーっ！」

指を弾くパチンという音とともに少年の体は煙にまかれて、もはやそこに少年の姿はなかった。

「…ちょっと待ってよ、どうすればいいの私…」

そこは緑豊かな森の中。

一人取り残された有珠は、果たしてこれからどうすればいいのか。

「バカヤロー！！！」

消えた少年の姿を思い浮かべて、ただ叫ぶしかなかった。

*T o b e c o n t e n u e d . *

2008.9.4

002・お茶会に乱入

歩いてても歩いてても、見えてくる景色はかわらない。どこまでも続く小道をひたすら歩き続けて、有珠はすっかり疲れ切ってしまっていた。

「足痛い…喉渴いた…」

歩きつばなしで足はすでに棒のようになり、何も飲まず食わずで体力はほとんど残っていない状態。

「あれー、疲れて嗅覚おかしくなったのかな…甘くておいしそうな匂いが…」

甘い甘いケーキやクッキーの匂いと、香ばしい紅茶のかおりとが有珠の鼻をくすぐる。

匂いをたどって目の前にある草を掻き分けて進んで行くと、開けた場所に出た。そこには丸いテーブルが置かれていてクロスがひかれており、その上にはケーキやらマフィンやらたくさんのお菓子が並べられていた。

【お茶会に乱入】

「…やばい、幻覚まで見えてきちゃった…」

森のなかに意味もなくお菓子のがったテーブルがあるだなんて、どう考えても普通ではない。有珠は悩ましげに頭を抱え、目をきつく閉じた。次に目を開いたときには、このお菓子たちが綺麗さっぱり無くなってくれることを期待して。

「…ダメだ消えない」

おいしそうなお菓子たちは目を開いてもなお、魅惑的な香りともそこにあった。

「そっかそっか、これは夢なんだ…」

きつと疲れすぎてそのまま道端で倒れてしまい、気を失っているのだろっ。だとしたら、わりと幸せな夢を見れているのではないかと有珠は思った。

「…いいよね、どうせ夢だし。夢の中でくらい、良い思いしたって許されるよね」

そう、たかが夢なのだし。

自分の夢の中で一体何をしようと、自分の勝手である。

「紅茶一杯くらい、飲んだって…」

有珠は引き寄せられるように、黄金色に輝く液体の入ったカップに手を伸ばした。

「わ、良い香り…」

紅茶の香りがまるで有珠を包み込むように、いとも簡単に有珠を虜にさせる。有珠はもう何の迷いもなく、カップに口付けた。

「…駄目ですよ、勝手に人の紅茶を」

「ぶふっ!!」

紅茶を啜ろうとした瞬間耳元で低く囁かれ、悪寒とともに紅茶を吹き出してしまった。紅茶のほのかな甘味だけが口に残る。はずだった。

「何これ。甘…、甘っ!」

むせ返るような甘味が襲い掛かってきた。渴いた喉は潤されることとはなく、甘すぎる紅茶は喉に痛いくらいだった。

「…甘い、ですか」

声も出せず、涙目になりながら頭を上下に振る。

「私はこれくらいが一番好きなのですが」

見ず知らずの人の好みなんかどうでもいいけれど、とりあえず耳元で囁くように話し続けるのはやめてほしい。

「いったい…だれ…っ？」

今だにヒリヒリと痛む喉から絞りだすように声を出す。ふらつきながら、背後に立つ人物から離れた。

「…私ですか。私はLです」

「える…？」

男は右手の人差し指と親指で、アルファベットのLの字を作ってみせる。

「はい、Lです」

Lと名乗ったその男を有珠はまじまじと見つめる。漆黒の髪と漆黒の瞳は有珠と同じ日本人の雰囲気を感じさせるが、整った顔つきはどこか外国人を思わせた。瞳はまるで見る者を吸い込んでしまいそうなほど深く、目の下の隈がその眼をより大きく見せていた。そして何よりも気になったのが、頭にかぶった帽子。

「何、それ」

帽子を指差して問えば、しは無表情のまま有珠の指差す方向を眺める。それが自分のかぶった帽子であると気付いたしは、帽子を頭からとって目の前に置く。

「…帽子ですが」

「そのくらい分かるから！」

「はい。そうですか」

「私が言いたいのはつまり、帽子は普通一つで十分でしょ。そんなふうに三つも四つも重ねてかぶる必要ないんじゃない？」

しは穴が開くほどに帽子を見つめ、やはり分らないと言つように首を傾げた。

「変でしょうか」

「うん、変」

「そうですか」

「うん」

親指を口元に運び、考えるような仕草をするし。

「…それでは、お茶会を始めましょう」

「え、何でそうなるの!？」

「このとおり、もう準備は整っていますし…今日はお祝いです」

「お祝いって、一体何の」

「何でもない日のお祝いです」

「意味分かんないから」

「そうですね、言うならば…あなたに出会えた今日という日に」

ティーカップ片手にそう言って、Lは漆黒の瞳で有珠を捕えた。

「……………」

「ところで、お名前を伺ってもよろしいですか」

「さっきから突然すぎだよ」

「そうですね。で、お名前は？」

「……、有珠。『有無』の有に『数珠』の珠で有珠」

「有珠さん、ですか。中々ユニークな偽名を使っているじゃないですかね。アリスの物語が好きなのですか？」

「悪かったな偽名っぽくて。でも正真正銘の本名、私の名前は志城之有珠！」

つい声を荒げてしまってから一瞬口をつぐんだが、もはや歯止めは聞かなかった。“志城之”という苗字から“不思議の国のアリス

”にちなんでも付けられた名前。この名前のせいで何度もからかわれたことがあり、有珠にとってこの名前は一種のトラウマなのだ。名前に関しては、両親を恨まずにはいられない。

「どうせ変な名前ですよーだ！」

ベーツと舌を出して敵意をむき出しにする有珠。対するしはしばらく微動だにせぬまま有珠を見つめていたが、し指の先に摘まれていたフォークがガシャンと音を立てて皿のうえに落ちた。

「まさか、あなたは」

大きな三白眼がこれでもかと言わんばかりに見開かれて、有珠は思わず身を固くする。有珠を見つめたまま親指が無造作に口元に運ばれて、その唇を撫でていた。唇だけ動かして何かを囁いたが、有珠には聞き取ることができなかった。

「今、何て…」

「…今後、本当の名を口にしないほうが身のためです」

「…？何で…？」

「この世界は“あなた方の世界”とは違うからです」

「よく分からない…」

「まあ、“アリス”という名でも充分偽名に聞こえますし」

「…さっきの今で失礼な」

「苗字だけは、絶対に名乗ってはいけません。アリスさん、あなたの身の安全に関わることですから」

「いまいち信じがたかったが、こちらを見据えているLの瞳にはかなわなかった。」

「…うん、わかった。わかったからそんなにじっと見ないでよ」

「はい、わかりました」

有珠は小さくため息をついた。何なんだ、この世界は。

「さあ、お茶でも飲みましょう」

「…はあ、いただきます」

「お砂糖はいくつ入れますか？三つ、四つ？」

「…一つでいいです」

差し出されたポットから角砂糖をつまんでカップに入れる。Lはというとポットを自分のカップの隣へと引き寄せてドバドバと砂糖を放り込んでいく。

「入れすぎだよ明らかに」

「私はこのくらいが好きです」

「ああ、さいですか」

もう何も言うまいと、有珠は心に誓った。

森の中で出会ったのは奇妙な帽子男、L。彼が異常なまでの甘党だということ以外は何もかもが分からずじまい。

この世界に関する様々な謎は未だ謎のまま。

*T o b e c o n t e n u e d . *

2008.9.6

003・性悪猫にご用心

「そうだ、ずっと引つ掛かってたんだよね…この訳の分からない世界のこと」

有珠は突然閃いて、椅子から勢い良く立ち上がった。ティーカップが倒れてテーブルクロスに染みを付ける。

「初めに会ったあの男の子、あれは“不思議の国のアリス”に出てくる白ウサギ　だとすると、この変人さんはイカレ帽子屋？」

「…私が、何ですか？」

「ウサギ耳の男の子、時計持ってたし。それにこのお茶会だって…」

「…お茶会が、何ですか？」

「もしかしてもしかすると」

「ここは幼い頃に絵本で読んだ“アリスの世界”、なのではないだろうか。

【性悪猫にご用心】

「本当の本当にそうだとしたら、これってすごいことだね…」

現にアリスは白ウサギを追いつけてこの世界にやって来てしまったのだ。

「確かに私の名前はアリスだけど、これってすごい偶然なんじゃない…」

言い掛けてから、有珠は首を横に振る。偶然なんかじゃない。この出来事や出会いにはきつと、何か意味があるはずなのだ。

そうとでも思わなければ、有珠はこの世界でやっていけない気がする。

「うん。とりあえずこの紅茶はおいしいよ。疲れが大分とれたみたい」

「そうですか、それはよかった」

「えーと、Ｌさん？」

「Ｌで構いません」

「Ｌ、Ｌはいつも一人でお茶会を？」

「いえ」

空になったカップに再び紅茶を注ぎながらＬは否定した。

「今日は月君がお城へ出かけているので」

「ライト？また不思議な名前……」

「月と書いてライトと読ませるのだそうです」

「へえー、かつこいい。頭良さそう」

「そうですね。彼は聡明です」

「……ということは、二人でこのお菓子を準備して、二人でお茶会をしてるってこと？」

テーブルに広がる大量のお菓子を眺める。どれもこれもおいしそうで、味も最高なのだろう。偏見だが、有珠にはＬが作ったとはとても信じられなかった。

「これらはすべてワタリが用意してくれたものです」

「ワタリ？その人も、今日は留守なの？」

「……苺を」

しは親指と人差し指で苺を摘み上げると、そのまま口に放り込んだ。

「……苺を？」

「採りに行っています」

「……はあ、苺狩りですか」

有珠が元居た世界では季節は夏、苺狩りの季節ではなかったはずなのに。そういえばこの世界は暑くもないし、だからといって寒いわけでもない。テーブルの上にはフルーツの盛り合わせもあってよく見てみれば、季節感というものが全くないことに気付く。

「リンゴにメロンにスイカにパイナップル、オレンジにマンゴーにパイヤ……うそ、これってドリアン？」

有珠は思わず身を退いてしまった。何でも有りなのだろうかこの世界は。

「ねえし、この世界には季節がないの？」

「季節、ですか」

しの表情から、有珠には充分読み取ることができた。

「やっぱりないんだ。私のいた国には季節っていうものがあってね、

春・夏・秋・冬それぞれで気温も天気の様子も全く違ってたんだよ」

「気温や天気によって、日々を分けることが出来たんですか」

「そう。それに地域によって採れる作物も限られていたし、そもそもその時期毎にも限定されていたんだよ。ドリアンなんて私の居た国じゃ採れない作物だし」

ビニールハウスなど気温設定の技術が発展してきているとはいえ、パイナップルとリンゴが同じ器の上に並んでいるのを見るとやはり違和感を感じずにはいられない。

「そうだ、話を戻さなきゃ。アリスの世界、アリスの世界……」

白ウサギ、帽子屋ときたら三月ウサギや眠りネズミもいるだろう。ハートの女王もいるのだろうか？

「あ、そうそうチェシャ猫も……」

「俺を呼んだか？」

「別に呼んではないけど。チェシャ猫もいるのかなあ、いるなら会ってみたいなあって思っただけ」

「だから、俺を呼んだか？」

「だから、呼んでな」

“な”の口のまま、有珠は全身が石になってしまったかのように固まった。自分でも仕方ない反応だと、有珠は思った。人間が、宙

に浮いているのだから。

「ぶっ、ひでエ面してんなお前」

上下逆さまなんだからひどいも何も無いんじゃないか。それ以前にレディーに向かつてその言い草はあんまりだ。

しかしながらそれを口に出すことが出来るまでには、あいにく思考状態が追い付いてはいなかった。

「お前、人間なんだ？」

宙吊り状態のまま男はにんまりと笑う。逆さまの状態で風になびく美しい金髪のなかに、有珠は猫の耳を見た。ありえないことが一度に起こりすぎたためか、有珠はすっかりパニックに陥ってしまった。

「ああああんた何っ、猫が喋って…!？」

「俺？さあね。何だと思う？」

「ち、近い近い近いっ！」

じりじりと迫ってくる男から出来るだけ距離を取りたくて、椅子を後ろに引く。

「何だよ、ビビッてんの？化け兎がいるなら化け猫がいたっておかしくも何ともねーだろ」

「訳分かんない……ぎゃっ！」

勢い余って椅子ごと地面に引っくり返った。咄嗟に掴んだテーブルクロスがその拍子に引っ張られて、失敗したテーブルクロス引きのごとくお皿やカップが音を立てて地面に落ちた。

「痛あー…」

今の衝撃で背中を強く打ち付けたが、おかげで我を取り戻すことが出来たようだった。

「そう、そうだよ…猫耳なんて今更だよ。落ち着け私」

頭から被ってしまったテーブルクロスを引っぺがし、背中をさすりながら起き上がる。猫耳男は相変わらず性悪そうな笑みをたたえて宙に浮かんでいた。

「ちょっとあんた！いきなり現われて失礼極まりないことをペラペラと…どういうつもり!？」

「随分威勢がいいのな。気に入った」

「気にいらんで結構!」

「なあ有珠?」

いつの間に移動したのか猫耳男は有珠の背後に回っていて、耳元から声が聞こえてきた。その感覚に、ゾクリと悪寒が走る。

「“この世界では普通”、“そうでない世界では普通でない”。さて、何だと思う?」

気付かぬうちに首に手が当てられていて、その手は何か大切なものにでも触れるかのように有珠の首を撫でた。

「…っ」

突然のことに、声が出なくなる。

「ほら、有珠？」

惑わされる、有珠の中のすべてが。

同時に襲い掛かってくる恐怖心と、それにも勝る嫌悪感。有珠は震える身体を半ば意地で動かして、有珠の首に触れている猫耳男の腕を掴んだ。

「ぜんぶ…っ、異常だよ…！」

「…当たり前でもあるし、外れでもある」

一瞬、何が起こったのか理解が出来なかった。自分の口から出た声になっていない呻きに、なぜこんな声になってしまったのかと首を傾げる。次第に苦しくなる呼吸、足りなくなる酸素。ようやく有珠は、自分の首にあてがわれた手に力が加えられていることに気が付いた。

「…ぐっ、は…あっ！」

「所詮儚い生きものだ、人間なんて」

「…はな、せ…」

「…まだ抵抗しようとしても？」

ニタリと笑う猫耳男に、有珠の中の何かが音を立てて切れた。

「…ん…っ！」

容赦なく締め付けてくる男の腕に、有珠はこれでもかと言わんばかりに爪を立てた。

こんなところで、死んでたまるもんか。

「へえ…？」

さも可笑しそうに、喉の奥でクツと笑う。その仕草は不思議なことに、猫が喉をならすそれに似ていた。

「有珠」

名前を呼ばれるのと同時に、肺に空気が取り入れられた。ほんの一瞬失いかけた意識を必死につなぎ止める。

「またいつか」

猫耳男は顔中に笑みを張りつけたまま、空中に溶け入るように消えていった。

「…二度と…来んなっ…！」

それだけ言い終わると、次第に目の前が真っ白になっていった。

2 *
0 T
0 o
8
. b
9 e
. c
9 o
n
t
e
n
u
e
d
.*

004・魅惑の王子さま

「くっそー、あんの猫野郎…」

この時の有珠は、いまだかつてないほどに凶悪な表情をしていたに違いない。

「…アリスさん、その顔は女性としてNGですよ」

「うるっさい！」

【魅惑の王子さま】

「痛みますか？」

「イライライラ…」

「もう少し薬草を足しましょうか」

「イライライライラ…」

「彼はどうも、扱いにくい性格なんです」

「奴の話はするなーっ！」

叫んだ拍子に喉のあざが再び痛みだす。Lの持っていた薬草を豪快に引ったくり、痛む首に巻き付けた。

「…あんにゃろっ…」

「その薬草はよく効きますから、跡は残らないと思いますよ」

「跡なんか残ってたまるか、気合いで消してやる」

お嫁に行けなくなりでもしたらどうしてくれよう。あいつに責任を取らせるなんて、死んでも御免だと有珠は思った。

「たくましいですね、アリスさん」

Lは感心したように、けれど表情は変えずに言った。

「ん…？何か寒くない？」

「少し風が出てきましたか」

「うん、何ていうか、今って七月だよね？」

「はい、そうですが」

「七月ってこんなに寒いもんだっけ。…あ、雪」

白い小さな氷の結晶が空から舞い降りはじめた。

「これはまさかの展開だよ…七月なのに何なのこの寒さ。何なのこの雪！」

「そうでしょうか。この国では、これが普通です」

何とも無いような様子で空を眺めながら、Lは言った。

「…とはいえ、その格好では彼女が風邪を引いてしまうだろう、竜崎」

背中に暖かいものがかけられたのと、ほとんど同時だった。Lの声でも有珠の声でも、もちろんあの変体猫の声でもない声が聞こえてきて、有珠は勢い良く後ろを振り返った。

「月くんでしたか、お久しぶりです」

「二日前に会ったばかりだ」

「そうでしたか」

見知らぬ青年とＬとの不思議な会話に、有珠はしばし茫然と聞き入ってしまった。肩に掛けられたものが青年の着ていたコートであったと気付いて、有珠は慌ててお礼を言った。

「あの！これありがとうございます。えっと…？」

目の前にいるこの人物が誰であるかという大体的見当は付いていたものの、有珠はかうかがうように青年を見つめた。その視線に気付いた青年は、大人びた笑みを有珠に向けた。有珠の心臓が小さく跳ねる。どこか憂いを帯びたような、それでいて自信に満ちたような笑みは、まるで物語に出てくる王子様のようにだと有珠は思った。

「初めまして。僕は」

「彼が月君です、アリスさん」

答えようとした青年の言葉を遮ると、Ｌは有珠と青年の間に割って入ってきた。

「…竜崎。自己紹介くらい自分でさせてもらいたいな」

呆れ眼でため息をつくその姿も王子様そのもので、有珠は見とれそうになるのを必死で持ちなおした。

「ねえ、 “ 竜崎 ” って一体？」

実はＬというのはニッケネームだったのだろうかと有珠は小首を傾げる。

「あ、もしかして“竜崎エル”っていう名前なの？」

「私は本当の名を語りません。私だけに限らず月君も、メロも。この世界で本当の名を名乗る人間は一人たりともいません」

私さつき名乗ったよ、という言葉が喉元まで出かけて、Lの瞳がそれを見抜いたように有珠を捉えたため慌てて飲み込んだ。

「まあ、彼のことを竜崎と呼ぶのは僕くらいだけどね。彼が一番始めに名乗った名が、竜崎。それ以来、僕は彼のことを竜崎と呼んでいるんだ」

「私は月君を月君と呼んでいます」

「へえー。なんだか、二人は特別な仲なんですね」

とんちんかなことばかり言うLを受け流しつつ。互いに愛称で呼びあう仲、といったところだろうか。有珠は感心する反面、そんな二人が羨ましくも思えてしまった。

「誤解しないでください。月君と私はライバルですから」

「ライバル？何でまた」

「アリスさん、あなたには特別に彼の本当の名前を教えてあげましょう。キラです」

「きら…？珍しい名前」

「“人殺し”の意味である“キラ”からきた名前です」

「ひっ、人殺し!?!」

「何バカなことを言ってるんだ竜崎。僕は月、それ以外に名前なんて無い」

「複数の名を持つことが悪いことだとは、私は思いませんが。私は必要な分だけ、名を持っていますから」

「話をややこしくするのはやめてくれ、竜崎」

「うん、何ていうか、月さんも色々と苦労してるんですね」

妙な同情心が生まれてしまい、労りの言葉が思わず口を突いて出てしまった。

「まあ彼とはそれなりに上手くやっているんだ。気に掛けてくれてありがとう。アリスさん、だったかな？」

「はい、アリスです。初めまして月さん」

「初めまして。月って呼んでくれて構わないよ」

「ええっ、呼び捨てだなんて何だか申し訳無い気が」

「おもしろいね、アリスさん」

可笑しそうに笑う彼の表情は、殊更に輝いて見えた。同時に妙な恥ずかしさを感じて、火照った顔を俯かせた。

「アリスさんが好きなように呼んでくれて構わないから。ただし、敬語はやめてほしいな。あんまり年齢も変わらないだろうし…アリスさんが迷惑じゃなければだけど」

「いいえ、ははい喜んで！」

王子様の仰せの通りに！と言わんばかりに、有珠は目を輝かせた。我を失いつつあると頭ではわかっていても、目を合わせる人間に“いいえ”と言わせないような能力を持っているのではないかと疑ってしまっくらいに、彼は有珠を魅了させた。

「…それにしても、ひどい雪だね。そのうち止むのかと思ってたのに」

気が付けば辺りはすっかり雪景色だった。重々しい白色の雪雲を見るかぎり、空から舞う雪は止む気配がない。

「……雲の流れはいつだって、女王の気まぐれだ」

「え？」

ほとんど無意識の言葉だったのか、聞き返した有珠に向かって彼は苦笑いをこぼした。

「この国の女王は、少し変わった方だから」

「とても美しい方だと、私は思うのですが」

親指を加えたしは、物ほしそうにそう呟いた。

「まあね。地位も名誉も、富も美貌も。すべてを手に入れた、この国のトップに立つ者」

「へえー…女王様かあ。会ってみたいかも」

「いつか会えるんじゃないかな。アリスさんならきっと」

何故だろうか。

この時、柔らかに微笑んだ彼の笑みは、有珠に妙な違和感を感じさせた。気のせいだろうと思えるくらい、ほんの少しだけ。

「…しは会ったことあるの？」

「はい。一度だけですが。それはそれは美しい方です。私の好みの女性でした」

「ふーん…これだから男ってやつは」

「私も立派な男だということです」

開き直ったように言うしに、有珠はますます冷たい視線をぶつけるのだった。

「…ああ、そろそろ時間だ」

腕時計を見た月は何かを思い出したようにそう言って、すまなそうに有珠を見つめた。

「ごめん、アリスさん。会って早々だけど、これから予定があるんだ。今日はこれで」

「いえ。何だか引き留めてしまったみたいで、ごめんなさい」

「そんなこと。話が出来て楽しかったよ」

王子様スマイルを惜しげなく見せて去っていった彼に、有珠は何度目かになる胸の高鳴りを覚えたのだった。

「…かつこいい…」

「まあ、多くの女性が彼に憧れを抱くのは仕方のないことなのでしょう」

ケーキの最後の一口を口に運び、さほど興味がなさそうにしは言った。残しておいたのだろうか、真っ赤な苺をフォークで弄びながらしはさらに言葉を続ける。

「彼は王室付きの騎士ですから」

「ええ！？騎士って、ナイトの騎士？」

「そうです。それが彼の職業です」

「へえー。王室付きの騎士ってことはつまり、月さんは女王様専属の騎士ってことになるんだ」

「そうなりますね」

「へえー…」

女王を守り、正義を貫く騎士。誠実そうな人柄の彼には、まさしく天職だと有珠は思った。何より、騎士の姿が様になりそうである。

「…それに比べて…」

「私の顔に何か付いてますか？」

悲しいかな。目の前にいる猫背で奇妙な、帽子を三段重ねて被る怪しげな男は言うまでもなく。

「…帽子屋でしょ」

「はい、私は帽子屋です」

「そうだよ、それ以外ありえないよね見た目からして」

「そうでしょうか。人は見た目によらないものです」

「…そうでもないと思うよ」

帽子をこれでもかと言わんばかりに三段重ねてよく言つよ、と有珠は心中で鋭いツツコミを入れずにはいらなかった。

「もうしばらく、雪景色にお付き合いしましょう」

「げっ、まさかこの寒さの中でお茶会続行？」

「そのまさかです。雪が降ったお祝いに」

「何がめでたいのか、本気でわからないから」

こんなメチャクチャなお茶会なんかにつき合っていたら、いくら体力があっても足りない。ひどくなっていく寒さに身震いし、有珠は冷めた紅茶を入れなおすのだった。

*T o b e c o n t e n u e d . *

2009.2.20

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405f/>

A・N アリスノート

2010年10月13日15時02分発行